資本主義の「略奪的段階」と天皇制（天皇制テロリズムと「略奪」資本主義）

2．11「建国記念の日」反対！　改憲・大軍拡NO! 競争・強制でなく、命と人権を守る教育を！　集会

2023/02/11　大阪公立大学　酒井　隆史

0, きょうお話ししたいこと

□ 1，天皇制をこう捉えてみてはどうか？　あんまり人びとが天皇や皇室を愛していると考えすぎないために。

□ 2，そう考えてみると、どのような人びとの欲求がみてくるか。

□ 3，いまわたしたちはどんな状況のもとにいるのか？　資本主義の現在はどこにむかっているのか？

□ 4，それと1，2で考えてきたことがどう関連しているのか？

1，天皇制を「解釈労働」という視点から考える

- 「日本では一木一草に政治【天皇制】が感じられる」←竹内好
- 本当にそうだろうか？
- ここで導入したいのが、「解釈労働」という概念
- 「解釈労働」は、フェミニズムや人類学が発展させてきた、人間社会における支配や被支配、上位者と下位者のありよう、つまりヒエラルキーの仕組みを説明する概念

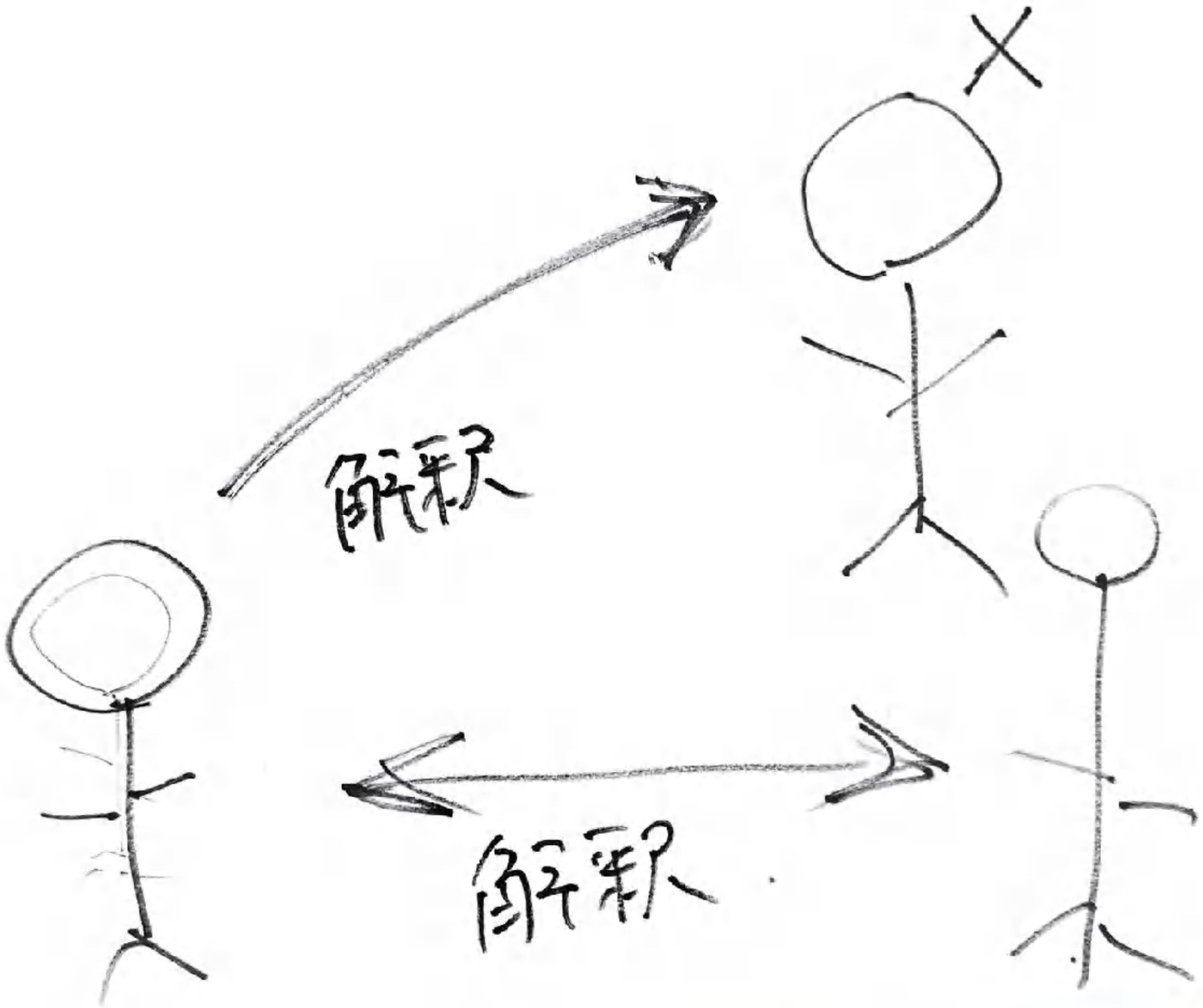
- 「解釈労働」とは、他者がなにを考えているのか、なにを感じているのか、なにを望んでいるのかを、いろんな手がかりから考えることを指す
- 「顔色をうかがう」とか「空気を読む」、あるいは「忖度」と、日本語では、そういった表現にこの「解釈労働」があらわれている
- ひとは、こういう労働を遂行することで社会関係を構築している

- ところが、問題なのは、この「解釈労働」は、だれもが等しくおこなっているわけではないこと
- つまり、それは不均衡に配分されていること
- たえまなく、解釈労働を遂行しなければならない人もいれば、ほとんど遂行しなくてすむ人もいる
- 解釈労働が重くのしかかるのは、ヒエラルキーにおいて下位のひと／解釈労働をまぬかれる程度の大きいのは、ヒエラルキーにおいて上位のひと

- 人びとは日常的にさまざまなかたちで気づいているし、かつさまざまなかたちで表現されてもいる→たとえば「男には女の気持ちはわからない」とか「女は男の浮気をすぐ見抜く」とか。

- これらは両者ともに、「解釈労働」のジェンダー間での不均等な配分を男性側と女性側の視点からみたもの→たとえば妻は夫がなにを考えているか、なにを望んでいるか、どのような機嫌でいるのか、つねに推測しているけれども、夫は妻がなにを考えているか、なにをしたいのか、どういう気分なのか、すくなくとも妻ほど推測しなくてすませている

- つまり、男性と女性のあいだでは、「解釈労働」の負担は女性に重く負わされている


X
解釈
解釈

- このように「解釈労働」の非対称は、社会の上下関係、つまりヒエラルキーに重なっている
- としても、なぜヒエラルキーの上下が「解釈労働」の不均等な配分とつながることができるのだろうか？？
- それを可能にしているのが・・・

□ 暴力

- □ 暴力を使うことができるようなとき、相手の顔色をうかがったり、相手のいまのおもいとか、希望とか、おかれた状況などをいっさい省略できる

- □ これをしてほしい、といったとき、相手を説得したり誘惑したりするのには、あの手この手が必要ですが、暴力をちらつかせながらであれば、かんたんにさせることができる

2, そうすると、「一木一草に天皇制が宿る」とは、どういうことになるだろうか？

□ 「解釈労働」という考えをふまえて、それでは天皇制を考えてみると・・・

□ 天皇制への順応の調達には、この「解釈労働」が強力に作用していることがわかる

□ メディアも大衆も、つねに天皇「陛下」の内心おもんぱかっている（といわれている）

□ （より正確には、メディアが大衆を代表しておもんぱかっているふりをしているともいえるかもしれない、「泣き女」のように）

□ 「お気持ち」という表現は、「解釈労働」そのもの

□ 天皇や皇室の人びとが、大衆の「お気持ち」をおもんぱかるとはいわなー→それは、下から上への推察（解釈労働）

□ わたしたちは、天皇への愛着をだれよりも示し、だれよりも解釈労働を遂行しているのは、なんとなく大衆というイメージをもっている→しかし、2010年代にとくにみえてきたのは、それを率先しておこなったのが知識人（保守あるいは右翼政権に批判的な）たちであること

□ 天皇の「お気持ち」をいつも考え、ときに熱狂するといったある種の「愚かさ」のイメージを大衆に押しつけるのはまちがっているということです。それを率先しておこなっている、しかもそれに知的正当性を与えているのは知識人であること

- 厄介なのは、こうした「解釈労働」が愛情のような感情を生成させてしまうこと

- 解釈労働」は、支配する相手の側の心をつかもうとする努力→相手は、じぶんのことなど眼中になくても、こちらはその主人のことをいつも考えている→感情や欲望がつねに当の対象にむかっている。

- ここからこの関係のうちには、支配されているにもかかわらず、しばしばそこにストレートな暴力やいじめのような要素があるとしても、支配される側から支配する側への愛情のようなものが生まれてくるひとつの源泉がある（ストックホルム症候群など）

- □ しかし、それはあくまでこうした解釈労働の成立したフレームの内部でのこと
- □ 解釈労働を成立させるために、つねにそこには暴力が取り巻いている
- □ 天皇制は一木一草のように感じられる、というが、そのいっぽうで、人びとは天皇制にまつわることがらが批判がきわめてむずかしいことを知っている
- □ なぜかというと暴力につきまとわれているから
- □ 天皇にまつわるもろもろの批判的コメントが場を凍りつかせるのは、敬愛というよりは恐怖感→タブーは恐怖感によって生まれる

- □ 天皇制はテロリズム環境が取り巻いている、そしてそれを、人びとも知識人もよく知っている

- □ ところが、そうしたテロルの契機は、天皇制を語るときは脇に追いやられる

- □ わたしたちは天皇を「敬愛」しているとされている→しかし、それがこうした言葉のただしい意味でテロルへの恐怖の歪曲された表現であるとはいえないのだろうか？

- □ なぜ天皇への大衆の「自発的隷従」がクローズアップされるのか？　ひとつには知識人がみずからの恐怖感を抑圧していることにある→こわいことをこわいといえず、そこに理屈が生まれてくる？？

3, それらをふまえて想像してみるのが大事だとおもわれること

- □ もしこうした恒常的テロルの環境が消えたと想像してみること

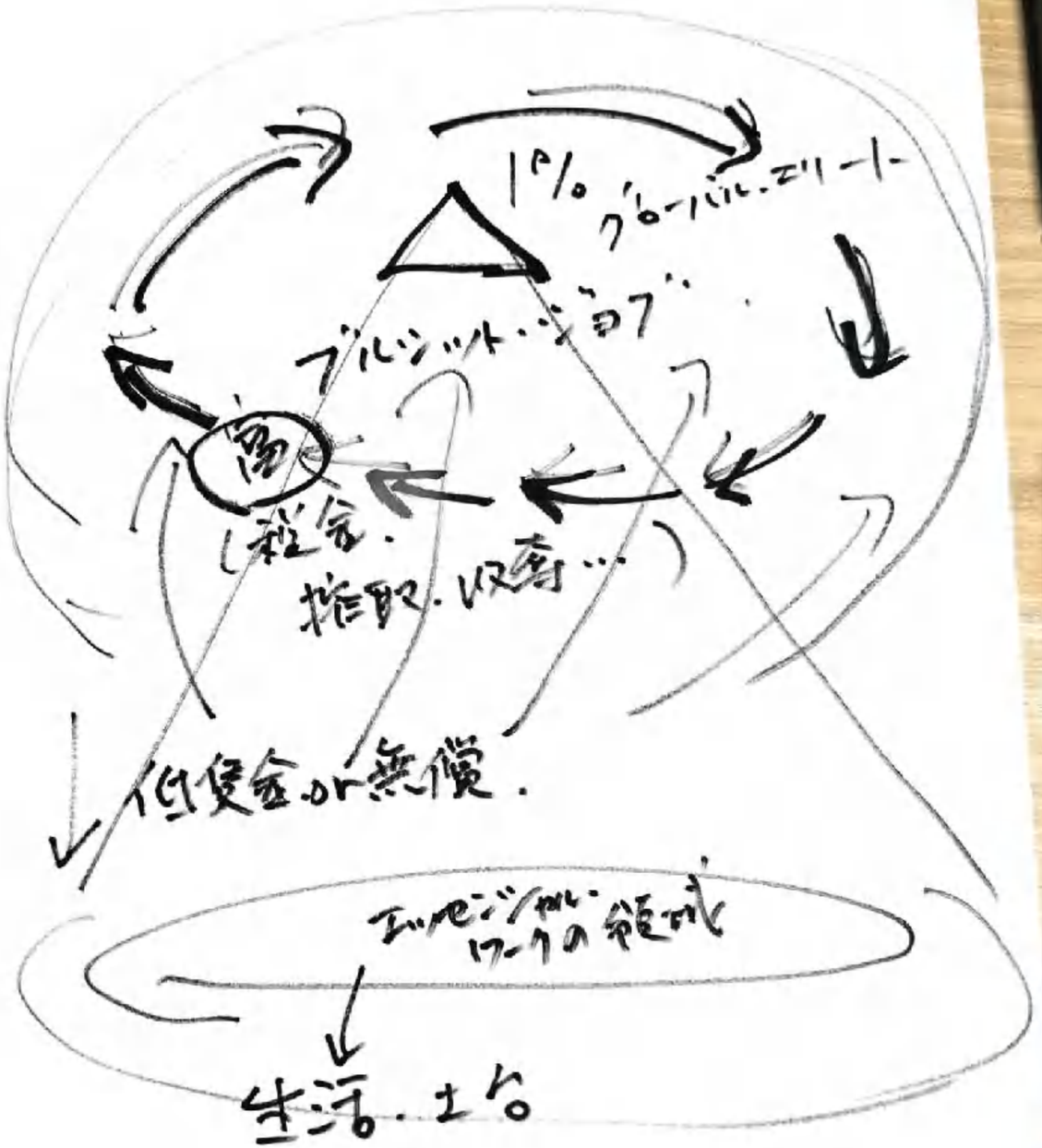
- □ マスコミは敬語表現をやめる、制度のありかた、存在の是非について、自由闊達に議論できたとする→つまり人びとが「解釈労働」をやめる（あるいはおなじ人間として、皇室の人びともおもいを自由に語ることができるようになる）

- □ そのとき、人びとはこの制度をどうしたいとおもうか、あるいは、「自発的隷従」がどこまで調達できるか？

5, ここでいま、どんな状況にわたしたちはいるのかを考える

- 資本主義はもはやその正当性を担保していた3つの約束をはたせなくなってきた
- 1）次世代はより豊かになっている
- 2）テクノロジーが豊かさをもたらす
- 3）中産階級を分厚くすることで社会を安定化させる

- 資本主義はますます「略奪的」になっていく
- 社会の冨を動きをすべて監視して、あらゆる隙間からも税金を吸い上げる（→マイナンバー、インボイスなど）
- 人びとは丸裸に、支配層はますます黒塗りの闇に
- そしてたとえば、メガイベントのようなかたちで、その冨を上位の人びとでシェアをする
- 資本主義の「略奪的段階」


1%
グローバル・エリート
ブルシット・ジョブ
富
(税金・搾取・収奪…)
低賃金 or 無償
エッセンシャル・ワークの強化
生活・土台

- □ ネオリベラリズムとはなんだったのか？
- □ 近年のネオリベラリズムの研究がたどりついたおおよその結論
- □ ネオリベラリズムは「市場原理主義」でも「経済理論」でもなく、「市場」や「経済」のイメージや論理（もどき）によって社会全体を再編成しようとする「政治的プロジェクト」
- □ そこで優先されるのは、「効率性」でも「生産性」でもなく（その点では、ネオリベラリズムはすべて失敗してきた）、いまとは異なる世界を希求する可能性の感覚を窒息させること
- □ その点で、日本はネオリベラリズム劣等生ではなく、最優等生

□ いまここで、1）ネトウヨ的ヒエラルキー（日本型極右ネオリベラル型）ヒエラルキーと、2）天皇制的ヒエラルキーをわけてみる

□ みかけとしては、1）分極化／排除／暴力、2）包摂／人道／非暴力、というふうに提示される（まったくそこに内容が対応していないわけではない）

□ しかし、形式として、機能としては、みてきたように、暴力によるヒエラルキーの保全、そうしたヒエラルキーへの日常的な慣れ／自明化（よくいわれる日本社会にはあちこちに○○天皇が生まれる、タブーの形成（事実、真実の減価）といった点で、2）が1）の基盤を与えつづける

□ 安倍元首相という1）のカリスマが2）の様相を帯びる理由

- 暴力的雰囲気の蔓延→ヒエラルキーをつくって、「切り捨ててよい人間」「死んでいい人間」を振り分けていく、マイノリティへの暴力の激化、高齢者は自死すべきといった論調の出現

- ヒエラルキーをつくりたい衝動→日本のいまのネットインフルエンサーなど（ひろゆき、メンタリストDaiGoなど）

- タブーをつくり、テロル環境を恒常的なものとし、こうしたヒエラルキーを自明のものとするよう、天皇制は機能している

- しかし、これらはすべて、限界に直面した現代世界の亀裂を直視しないところ、あるいは先延ばし（「わがなきあとに洪水よ来たれ」）の生んだ、過渡期の現象

- 世界的には、若い世代の気候危機への強力な危機感とそれにもとづく行動の展開
- アメリカにおいても、若い世代の半数以上が、ポスト資本主義をのぞむという状況
- また「アンチワーク」「寝そべり族」といった、洋の東西を問わない、コロナ禍を契機とした、現在のシステムから逃避していく動き
- 暴力に裏打ちされない、ヒエラルキーのない世界を、率先して実現させ、ありうるものとして提示していくことが必要